周作怠談

12の招待状

遠藤周作

〈検印省略〉

周作怠談　12の招待状

昭和五十四年九月二十八日　第一刷発行

定価　六五〇円

著者　遠藤周作

発行者　石川晴彦

発行所　株式会社　主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一―六
電話　二九四―一一一一（大代表）
郵便番号　一〇一
振替　東京二―一八〇番

印刷　凸版印刷株式会社

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

© Shûsaku Endô 1979

Printed in Japan 0095-909242-3062

周作怠談

12の招待状

遠藤周作

周作怠談

12の招待状

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

まえがき

対談は好きだ。今日までどのくらい対談をしたか、わからない。

対談が好きなのは幾つかの理由がある。

第一にはそういうチャンスがなければ会えない人と話ができるからだ。小説家という仕事は意外と交際範囲を狭くする。その壁を破って知らぬ世界の人と話ができるのは対談だ。

第二にそのおかげで、その後、仕事を離れて親しい友人となった人が何人かいる。これも対談のおかげだ。

第三にそれぞれの人からその人の専門とする仕事の話、その仕事から得た人生観を聞ける。特に一芸に秀でている人の芸談をきくのはこたえられない。

第四にスクリーンやテレビでしかお目にかかれぬ美しい人とも話ができ

る。

第五に……いや、もうよそう。以上、あげただけで私が対談がなぜ好きか、おわかりになって頂けたと思う。

対談において私は聴き役だから相手の話を引き出す刺激剤としか自らを語らない。そのかわり比較的、冷静に相手の人の物のみかたの浅さ、深さはじっと計っている。心底から感心する人もいれば、なんだ、これぐらいの人かと心中、思う時もある。それが対談だ。対談とは時には剣士と剣士の勝負であることもある。活字には（笑）と書いてあっても。

遠藤周作

周作怠談

12の招待状

目次

まえがき／4

ねむの木の子どもこそ「人間の証明」です——宮城まり子／9

きみはまるでカルメンのような女性だ——長嶺ヤス子／25

私はおいしいものを独占できないんです——淀川長治／43

今度はぼくを映画で使ってください——山田洋次／61

つらいもんですなァ、娘を持つ父親って……——岩井半四郎／77
勝負師は技より心ですッ！——二子山勝治／93
のんびりしてるなんて地獄なんです——赤塚不二夫／111
いいかげんな演技って許せないくらい腹が立ちます——秋吉久美子／127
毀誉褒貶には平然としているんです——池坊保子／143
男の子にはゲンコツ玉が必要なときがあります——島岡吉郎／161
あと一年のがまんと言われつづけました——市川海老蔵／177
結婚は情熱じゃない、愛なんだ——檀　ふみ／195

ねむの木の子どもこそ
「人間の証明」です

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

宮城まり子

昭和30年「ガード下の靴みがき」が大ヒット。その後、ミュージカル女優として、映画に舞台に活躍。43年、私財を投じて肢体不自由児の養護施設「ねむの木学園」を創設。ドキュメンタリー「ねむの木の詩がきこえる」は、多くの人に深い感銘を与えた。

選べる自分と選べない子の不公平さ

遠藤　この対談集の最初のお客さんにまりちゃんに来ていただいて、とてもうれしいよ。なぜうれしいかっていったら、ほかの人もいろんなことやってるけど、まりちゃんみたいに、自分の仕事以外に子どもたちのために尽くしてきた人ってのはいないでしょ。

で、まりちゃんね、もし失礼な質問だったら答えなくていいんだよ。いちばん初め、どうして学園をつくる気持ちになったか、それはいつごろかっていうような話を聞いたらいけないかしら。

宮城　いいえ、そんなことない。

遠藤　昔さ、もう十年ぐらい前だったか、いっしょにパリで、ぼくのかみさんやぼくと過ごしたとき、あのときはまだ決心していたわけじゃないでしょう？

宮城　あのときはもう二十年近くも前よ。

遠藤　そろそろ考えてたころ？

宮城　はい。

遠藤　あのとき弟さんがお亡くなりになって、とても悲しかったでしょう。だから、それ

が契機となって、子どもたちのための学校をこしらえようという気持ちになったんかなあと、漠然と考えていたけど。

宮城　そうね、私、これはほんとうにわかんないんですけど、探っていったらずっと小さいときみたいなの。いちばん最初に思ったのは、十二才のときに母が死にまして、きょうだいは二人だし、親戚はいないし、母が死んでからあらためて悲しかったんですね。あとで悲しくなって、わんわん泣いて、そのときに、大きくなったら学校の先生になろうと思いました。私みたいに泣いてる子がいっぱいいるだろうなァ、その子にやさしくしてあげる人になろうって、それがそういうものをつくりたいなあと思ったいちばん最初みたいな感じです。

　そのあと、歌を歌うことが仕事となって、くつみがきの歌とか、くず屋の娘の歌とか歌いながら、またそれで自分がお金をもらうことになんとなく申しわけないみたいなものを持ってて、ほんとうにかわいそうな子どもの歌を歌ってお金もらってるなあ、という気持ちがいつもあったんです。

遠藤　うん、うん……

宮城　それから、私は女優さんですから、いろんな役、しかも子どもの役が多くて、目の見えない子とか、精薄の子とか、精神病とか、そういう役ばっかり来ていましたから、そ

ういう施設や病院に行くたびに疑問を感じたんです。「これでいいのかなあ……」ばっかり感じるの。

遠藤　それは、こういう子どもたちをほったらかしていいのかなっていうこと、自分が？

宮城　そう、自分が。それと、私は、たとえばこれとこれと選ぶことができて、その子には選ぶことができないってことの不公平さが、とっても不愉快だったですね。私がおいしいものを食べているのに、そこのおやつは、お客さんとして行ったときだから、そことしてはおいしいんだろうと思うけど、私にはおいしくないおしるこだったり、子どもたちがアルミニウムのお茶わんで食べてたら、私、瀬戸物のお茶わんで食べていいのかなあと思ったり、そんなことが重なってて……

遠藤　ほんとだね。ぼくも千葉の精薄の子どもたちの施設を見に行って、食器のそまつさもさることながら、食べ物のそまつさで、ほんとうに胸が苦しくなったことがある。

宮城　ですから、突然思いついてというんじゃないんです。だんだん押しつめられてやったみたいです。

何も知らずに一からスタート

遠藤　でも学園をつくりたいと思っても、資金がいるでしょう。そういうことはどういうふうにして考えたの？

宮城　それが愚かでねえ。ちっちゃくても、なんとか学校が建てばいいんだって思って。経済観念のないとこが、私のおかしいとこなんですね。恥ずかしいんですけど、どのくらいたいへんかってことが全くわからなかった。どういう子どもがそれを必要としてるかもわからない。どんなに職員を募集することがたいへんかということもわからない。だれかに相談すれば、とてもたいへんなことだからやめなさいと言われて納得したかもしれませんけど、相談する勇気もなかったし、相談する人も知らなかったんです。つくっちゃってから「アラ、たいへんだ」って……

遠藤　いちばん初め、現在のところへ敷地を買ったわけでしょう？

宮城　最初は、東京でさがしたの。でも、私が匿名で買おうとすると、私は女優さんだから、土地屋さんが別荘だと思ったの。

遠藤　で、値段をつり上げてくるわけ？

宮城　だんだん高くなってくるので、とうとう県庁ってとこへ行きまして。

遠藤　静岡県庁？

宮城　はい。その前に、神奈川も、千葉も行ったの。だけど、（宮城まり子と）わからな

いようにと思ったから、サングラスかけて、マスクして、こういう子どものお家をつくりたいんですけど、どの課へ行ったらいいですかって、守衛さんに聞くと、おかしいと思われて、「帰んなさい、帰んなさい」って追い払われたんです。それで静岡へ行って、そのとき、これはめがねくらいとらなくちゃいけないと思って、めがねとって聞いたんです。そしたら、教えてくれましてね。すごい遠いですけど土地も見つけてくれて。

遠藤　初めは何坪ぐらい？

宮城　三千坪。

遠藤　坪、いくらくらいで買えたんですか？

宮城　五百円。それで買いますって言ったら、町の財産区の好意でくださったの。だから土地はタダ。

遠藤　そういう気持ちならばタダでってくれたの？

宮城　いえ、財産区の土地だったんです。かってに砂が集まってできた土地

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.